



# Vision

## 2005年の新年に当たって

会長 金子章道

平成17年、2005年の新年を迎えました。会員の皆様、明けましておめでとうございます。本年が皆様にとって実り多い年になりますよう祈っております。

44年ぶりに我が国へ迎えるIUPS世界大会もあと4年後になりました。3月末にはアメリカSan Diegoの第35回IUPS世界大会で、連合旗を受け継いで参ります。4年後の国際会議を成功させるためにも、会員の皆様と力を合わせて、今年からは着実に準備を進めていきたいと思っております。なにとぞよろしくお願いいたします。

世の中ではさまざまな改革が進んでおります。われわれを取り巻く大学や研究者の環境も例外ではありません。国公立大学の法人化、大学設置基準の大幅改定、大学基準協会などによる外部評価の義務付け、終身雇用制度の崩壊、競争的研究資金の強化、科学研究費補助金の審査方式の変更、学術会議の改組、など大学人も自らの研究に没頭するだけでなく、世の中の荒波に曝される時代になってしまいました。研究成果の面で国際競争をするだけでなく、制度の面でも国際競争に立ち向かわなければならない時代だとおもいます。その思いを強くしたのが、昨年、中国において開催された研究集会に招かれた時でした。

その研究集会は「世界中国人生理学研究者会議 International Conference of Chinese Physiological Scientists」というものでした。また、これと前後して「第10回全球華人生物科学家大会（中

国語の漢字表記のまま）10<sup>th</sup> International Symposium of Society of Chinese Bioscientists in America」も開かれ、その開会式にも出席しました。両方の会議に共通することは国際的な舞台における中国人社会の結束の強さです。古い時代から世界における華僑の経済活動は良く知られています。また、欧米の都市には殆ど必ずといっていいほど中国人街China Townがあります。もちろん、日本でも横浜や神戸の中国人街は有名です。この中国人社会の結束の強さはScienceの国際競争における中国人の強さにもつながっていると思います。特に国際的に、且つ民族的に開かれたアメリカ社会ではその本領を発揮しているように思います。

アメリカの科学研究の「生産力」は海外からの留学生によって維持されています。海外から優れたポスドクを取って研究をさせ、それをその研究室のOutputとして活用し、研究室を発展させています。日本から留学する人たちも、一番仕事が出来るところの人達です。私はいつもこの力を（主として）アメリカのために捧げるのは何と切ないことかと感じています。私は決して国粋主義者ではないし、科学は全人類のものであって一国の物ではないことは承知しています。しかし私の目から見ると、中国人たちは、アメリカのScientist Communityが国際的に開かれていることをうまく利用しているように思えます。研究室を主宰出来るようになった実力のある中国人科学者たちは中国

から優れた留学生を受け入れて自分の仕事を発展させ、また留学生にもそのチャンスを作る手助けをする。このようなポジティブな循環から、中国人科学者はアメリカにおいて強力な「社会」を作っていると改めて感じられました。この民族的な底力には強い恐れを感じます。

日本人の研究者にももちろん優れた方々が大勢おられるし、アメリカを始めとして海外で国際的に活躍しておられる研究者も多くおられますが、中国人社会に見られるような外国を足場とした「日本人社会」の再生産という図式はまず無いと思います。日本人は国際協力というと、どちらかといえば、資金や労力を提供して周りと仲良くやっつけようとする人が多いように思います。しかし、投下したものを回収し、自らの利益も求めるという強い姿勢も必要なのではないでしょう

か。協力する相手方にも利益をもたらしつつ、自らに利することもがっちりと獲得するという中国人のやり方からもっと見習うべきことがあるように感じました。われわれも Give and Take という考え方を徹底して、国際協力でもしっかり発言してもらいべき物はもらうこと、与えられた機会を自分のために 100% 活用することを考えるべきだと思います。私は、先進諸国間での付き合いも、途上国を相手にする付き合いも、同じ高さの平面上でつき合う心構えを持つことが必要だと常に感じています。

直面しているさまざまな制度改革をばねに、われわれ研究者も国際競争で頑張り、2009年にはこれからの日本の生理学を世界に見てもらおうではないですか。